

CAMD 報告会

(Center for Development of Advanced Medicine for Dementia)

画像バイオマーカーからみた神経疾患と加齢性変化

脳機能画像診断開発部 分子画像開発室

加藤 隆司 室長

平成30年7月12日(木) 16時00分～

第1研究棟2階大会議室

認知症は、初診時に特定の疾患の診断に足る特徴的な症状が出そろっているとは限らない。疾患間で紛らわしい臨床症候が現れていることも珍しくない。経時的に注意深く経過観察を行うことで、確実に診断をすることができると考えられるが、ある一つの時点だけでは診断が困難なことも多い。治療や介護、社会生活上の対応を行ううえでは、より確実かつ早期の診断が求められる。そのような時に、期待されるのがバイオマーカーである。バイオマーカーは、血液や脳脊髄液中に存在して、病理や病態を示すタンパク質などのことであるが、画像もまたバイオマーカーの一つとしてとらえることができる。

THK-5351 タウ PET 検査の導入に合わせて、MRI は形態、FDG 脳糖代謝 PET (脳局所の神経活動)、PiB アミロイド PET (アミロイド病理) を組み合わせて、アルツハイマー型認知症や非アルツハイマー型認知症をイメージングする萌芽的研究を行ってきた。また、病院の診療では、MIBG 心筋シンチやドーパミントランスポータ SPECT も実施されている。これらを含めて、症例提示をしながら、認知症診断における画像バイオマーカーの overview を行う。THK-5351 は、検査開始後 monoamine oxidase B (MAOB) に結合することが判明したため、タウイメージング剤としての価値は減じたが、変性性認知症診断あるいは加齢性変化に関してイメージング剤として特異な画像を提示している。